

序 文

膵炎や膵癌の罹患者数は、増加の一途を辿っています。日本膵臓学会が主導して実施した 2021 年の膵炎全国調査(2021 年受療患者を対象)によれば、年間推計受療患者数は、急性膵炎が 61,080 人、慢性膵炎が 73,590 人、早期慢性膵炎が 7,260 人、自己免疫性膵炎が 16,750 人と報告されています。おそらく COVID-19 の影響により、軽症膵炎症例の入院が減少したために急性膵炎のみが調査開始後初めて減少しましたが、その他の膵炎では 2016 年の調査より大きく増加していました。一方、わが国では膵癌による年間死亡者数が 2023 年時点で 4 万人を超え、胃癌を抜いて癌腫別死亡数で第 3 位となりました。著名人が膵癌で亡くなったというニュースを、ほぼ毎日のように耳にします。胃癌や大腸癌のような対策型検診(住民検診)の対象とはなっておらず、“治る”膵癌を見つけることは容易ではありません。米国においては、近い将来に膵癌が癌腫別死亡数の第 2 位になると予測されており、まさに膵疾患は代表的なアンメット・メディカル・ニーズの一つです。

若い先生方のなかにはご存知ない方もいらっしゃるかもしれませんが、日本にはかつて、厚生労働省難治性疾患克服研究事業の一環として、「難治性膵疾患に関する研究班」が存在していました。私の手元には、今から 40 年前、昭和 60 年度(1985 年)の厚生省特定疾患難治性膵疾患調査研究班(班長：竹内 正先生)の研究報告書があります。そこでは研究の目標として「膵嚢胞性線維症、慢性膵炎、膵の発生異常、重症急性膵炎を対象とし、その実態を調査し、成因を調べ、病態を究明することにより、適切な診断法、治療法を確立することを最終の目標としている」と記載されています。慢性膵炎や膵の発生異常が「難治性膵疾患」として明記されていたことに驚かれる方もおられるかもしれませんが、それほどまでに膵疾患は難治性で、未解明の部分が多かったということです。40 年たった今でも解明されていないことも少なくありません。この研究班は、難病として医療費補助の対象とされていた重症急性膵炎や嚢胞性線維症だけでなく、慢性膵炎、自己免疫性膵炎も研究対象とし、日本における膵炎研究をリードする組織として確固たる地位を築いていました。この研究班の活動により、多くの研究が進められ、たとえば重症急性膵炎の致命率は 1980 年代の 30%から、直近の全国調査では 5%まで劇的に低下しています。また、世界に先駆けて提案された「早期慢性膵炎」の診断基準、自己免疫性膵炎の疾患概念の確立と診断基準の策定など、この研究班が果たした役割はきわめて大きなものでした。報告書自体が、当時の膵炎診療

の最前線を集約した貴重な資料であったともいえるでしょう。その後、重症急性膵炎が難病指定から外れたことなどを背景に、この研究班は2017年に長い歴史に幕を下ろすこととなりました。しかし、全国調査をはじめとする主要な事業は、現在、日本膵臓学会膵炎調査研究班が主体となって継続されており、先人たちが築いた貴重な歴史と成果を引き継いでいます。

さて、本増刊号は300ページ近くに及ぶ大作となりました。急性膵炎、慢性膵炎、自己免疫性膵炎、膵癌、その他の膵腫瘍の5パートに分け、それぞれの疫学、病態、診断、治療に関して日本を代表する専門家の先生方に加え、新進気鋭の若手の先生方にもご執筆いただきました。かつての難治性膵疾患に関する調査研究班の報告書をイメージし、本書一冊で膵疾患の最新情報を網羅的に理解できる内容となっています。膵臓専門医はもちろん、膵疾患を専門とされていない消化器内科医、一般内科医、さらに研修医の先生方にも理解しやすいように、図表、写真、イラストを多用し、わかりやすくまとめていただきました。ご執筆いただいた先生方には、この場を借りて改めて感謝申し上げます。ぜひ本号をお手元に置いていただき、明日から——いえ、今日からの診療の一助としてご活用いただければ幸いです。

2025年6月

東北大学大学院消化器病態学分野

正宗 淳